

前川 要 著：

『都市考古学の研究』

——中世から近世への展開——』

柏書房 1991年12月

A 5判 293ページ 3,800円

都市考古学というタイトルを掲げた研究書は、管見の限り、本書がわが国では最初のものであろう。

これまでわが国では、都市を対象とする考古学的研究といえば、宮都をはじめとする古代都市にはほぼ限られていたが、この20年余の間に、福井県一乗谷朝倉氏遺跡や広島県草戸千軒町遺跡を筆頭に、数多くの中近世都市でも発掘調査が行われるようになり、それぞれの調査報告書はもちろんのこと、個別の都市を対象とした研究書や論文、一般向けの概説書や啓蒙書の類も相当数刊行されてきている。

このような状況のもと、自らもいくつかの中近世都市の発掘調査に従事し、都市の考古学的研究を精力的に進めてきている気鋭の考古学研究者によって執筆されたのが本書であり、次のような構成になっている。

序 章 本書の課題と方法

第1章 都市考古学研究の方法

- (1) 城下町研究の研究史と問題点
- (2) 研究の方法
- (3) 都市遺跡の保護と学問的意義

第2章 中世都市から近世都市への展開

- (1) 都市遺跡の定義
- (2) 戦国期都市の諸様相
- (3) 近世城下町の成立
- (4) 近世城下町成立期の諸様相
- (5) 商工業者の動向

第3章 近世都市の展開

- (1) 近世都市の諸様相
- (2) 出土遺物の諸様相

終 章

まず序章では、「従来の個別細分化された考古学資料を空間認識を中心とした新しい方法を用いて組み立て、中世から近世への都市構造の変化を地域構造をも包括した形でダイナミックに把握して分析すること」が本書の課題であるとして、①『岩波講座日本考古学』、②従来の記録重視型の考古学、③従

来の個別遺跡の総花的記載型の中近世考古学の3者に対する挑戦を試みると述べている。

第1章(1)では、「近世城下町の初源を論ずる際に最重要である織豊期の研究」がこれまで乏しかったことを指摘し、従来の歴史学、歴史地理学的研究が明らかにしてきた近世城下町の諸特徴を整理したうえで、事例研究の際には「直線の道路で四周を囲まれた長方形街区とその中の長方形の屋敷割り、つまり短冊型地割りがいつごろまで年代的に遡上し得るかという点を中心に考察して、城下町のその他の構成要素も検討するという方法を使用する」と、本書の立場を鮮明に打ち出している。

第1章(2)では、江戸、伊丹郷町、名古屋城下町での遺跡研究を取り上げ、「近世都市遺跡の調査・研究に際して、空間的な変遷を地籍図や古絵図から十分に読み取った上で、関連諸分野の成果を導入しながら、遺構を読み取るべきであること」を論じ、このような視点で成功した研究として「八八清須シンポ」を評価し、「都市考古学は広義の歴史学に属しており、歴史学の成果を無視してはなり立たない」と主張する。中世城館研究との関係については、その主流となっている「縄張り研究が仮説を立て、考古学研究がそれを実証していく」という関係にあるとしている。

第1章(3)では、ヨーロッパの中世都市考古学研究に比べて、日本の近世「都市考古学」研究が停滞していることを指摘し、その背景として近世遺跡の保護が不十分であることを論じ、考古学が文献史学や建築史学・歴史地理学との積極的な学際的研究を前提にする必要性を主張し、考古学至上主義を批判している。

本書の中核をなす第2章では、まず(1)で、「都市」概念の再検討が必要であり、その際、地理学の中心地概念が重要であるとして、中世後期の尾張国を事例に、当時、尾張最大の中心都市へと成長していった清須城下町を軸として、考古学の成果をベースに都市発達を概観している。

その際、評者の研究を先駆的なものと評価していただいたのは光栄であるが、その発表年を、評者がその後の諸研究と合わせて刊行した著書の刊行年である1985年とされたのは残念で、巻末の参考文献目

録に掲載されている最初の論文の発表年である1965年とするだけの配慮が欲しかった。20年の違いは、先駆的という言葉の意味を薄れさせてしまうであろう。これに類する記述は、このほかにもかなり認められるので、ここで注意を喚起しておきたい。

第2章(2)では、青森県浪岡城跡をはじめ10カ所の戦国期都市の発掘調査事例を検討し、戦国期都市の「大きい傾向」を捉えようとしている。

第2章(3)は、1988年に「近世城下町発生に関する考古学的研究」として『ヒストリア』121号に発表されたものを基本に、若干改稿して再録されたもので、本書全体を貫く理論的基盤が提示されている。

ここでは、清須城下町（織田信長段階）以下12カ所の事例研究を踏まえ、寺内町の町割りとの関連をも検討したうえで、織豊系城下町の発展段階を、長方形街区と短冊型地割りのセットが城下町を構成するなどの要素にまで及んでいるかを主要な指標として、5つの段階に区分している。この段階区分は、発掘調査によって確認可能な街路区画と宅地区画のあり方に注目している点に特色があり、より多くの事例を検証することによって、その有用性が確認されることが期待される。

とはいえ、ここで対象にしている織豊系城下町の定義が必ずしも明瞭ではないことをはじめ、織豊系以外の城下町との関連など、さらに検討を深めるべき点も少なくない。また、城下町のプランについては、すでに歴史地理学の立場から、矢守一彦氏の変容系列や、足利健亮氏のタテ町ヨコ町論などが出されているにもかかわらず、これらについてまったく言及されていない点にも問題を残している。

つづく第2章(4)では、著者自身が発掘調査に従事した有岡城下町（兵庫県伊丹市）と岩崎城下町（愛知県日進町）について、上記の発展段階を踏まえて詳細な検討を加え、道南の中世城館にも言及したうえで、織豊期城下町の大規模な盛土整地は、「旧来の市場や町場、寺院、墓地などの旧権力の否定を行うために、統一政権によって意図的に施行されたものと考えたい」と、注目すべき見解を述べている。

第2章(5)は、「土器編年研究で明確化された『型式』の地方への移動を土器生産工人の移動と想定し、その歴史的背景を城郭の分布論で解釈しよう」という目的で、織豊期における瀬戸・美濃窯生産技術の伝播の歴史的背景を、織豊系城郭の地域的展開と文献資料によって説明している。

第3章は、織豊期の有岡城下町を母胎として、江戸時代に在郷町として繁栄した伊丹郷町を対象として、(1)では遺構・遺物を中心にして都市構造の展開を具体的に検討したうえで、「生活様式・都市形態などを包摂した都市構造を明確にすることの可能な考古学的方法は、都市史研究に非常に有効な手段となった」と結んでいる。(2)は有岡城跡と伊丹郷町で出土した陶磁器に検討を加えたものである。

終章では、考古学からみた中世前期から近世初頭までの都市と村落、および都市については近世末までの動向を概観し、各時期の遺物や遺構の特色を要約している。

このほか、巻末には21ページにおよぶ英文の要旨が付けられている。

以上、本書の構成に従って、若干のコメントを挿みながら内容を紹介してきた。

筆者は考古学にベースを置き、考古学の手法や考え方をふだんに活用しながらも、考古学の殻に閉じ籠もることを批判し、学際的な研究の重要性を主張して、本書のなかで自らの主張を具体的に提示し、実践している。そのために、文献史学や歴史地理学、建築史学などの既往の成果を積極的に取り入れ、イギリスを中心とするヨーロッパの都市考古学からも多くのことを学び取ろうとしていることは高く評価したい。

しかし、その取り入れ方には、先にその一例を示したように、かなりの偏りが見受けられるように感じられ、このことが、本書で提示された独創的な発想や立論について、その妥当性や普遍性を疑わせることにつながりかねない恐れがあるように思われる。また、本書の記述の中に、「〇〇が確認し得た」とか、「〇〇した（である）ことが推定し得た」といったような独特の用語法が散見され、いささか違和感を感じさせる部分があるのも気になる。

とはいえ本書には、新しく発見されたさまざまな事実や貴重な提言、さらにはユニークな解釈などが随所にちりばめられており、また、著者の所説を明快に主張して積極的に論争を挑みかけている部分もあって、読者を引き付けていく魅力に溢れている。この意味で本書は、中近世都市の発達や変化に関するこれまでの研究に、新しい角度から刺激を加えることによって議論を一層深化させ、発展させる力を秘めた話題の書であるということができようであろう。いろいろな分野の多くの方々に本書が読まれ、論議

の対象とされることを期待する所以である。

(小林健太郎)

日下 雅義 著：

『古代景観の復原』

中央公論社 1991年 5月

A 5判 250ページ 2,400円

本書は、すでに『平野の地形環境』や『歴史時代の地形環境』を世に問うている著者が、その後に表示したものを中心として、若干の加筆・修正を行い、一書としてまとめたものである。

本の体裁は一般向けの啓蒙書のスタイルがとられ、写真や地図がふんだんに挿入されており、しかも論旨明快かつ平易な文章で綴られている。しかし、一読すれば明らかなように、その内容の豊富さ・レベルの高さは、前著に比すべきものがある。

本書の構成は、以下のようである。

- I. 景観の復原と遺跡——はじめに
- II. 大地はかわる
- III. 『記紀』『万葉集』に自然の景をよむ
- IV. 生活の場を復原する
- V. 生産の場を復原する
- VI. 消費の場を復原する
- VII. 景観の形成と古代——むすびにかえて

まず、I章とII章では、III章以下の本論に先立って、古代の景観を復原・検討するに際しての研究手法や留意点など、この分野の研究を長年リードしてきた著者の手の内を手際よくまとめている。多くの事例を引きつつ、まさに大地が絶えず変わっていることを実感できる章である。その中にさりりと書かれた「したがって、現在の地形や土壌の様子のみから、古い時代の環境を推定するのはよくない。」(52頁)の一文は、現地表面の地形や微地形をやや安易に研究に用いてきたこれまでの歴史地理学に放たれた一矢として、心に留めおくべき一文であろう。

III章では、『記紀』や『万葉集』に記された海岸付近で用いられた「水門・門・岸・潮・渦」などの用語を、具体例に依りつつ逐一検討している。それに際しても、著者はまず当時の景観をできうる限り復原し、その上で史料を検討・解釈しており、従来の国文学や歴史学の解釈とは一味も二味も異なる解釈を導きだしている。すなわち、「水門」が河口部を指していたことや、「門」がふたつの陸地の近接した部分を指していたことなどを明らかにしている。

古代の景観復原に、『万葉集』の歌が有益であることが実感させられる章でもある。

IV章では、大井川扇状地の三角屋敷や京都府田辺町の浜新田など内外の事例を引きつつ、低地に生活する人間と水との戦いを、地形学の側面から復原・検討している。

これに続くV章とVI章は、本書の中でも著者がとくに丹念に書き込んだ、端座して味読すべき内容に溢れる章である。まず、V章では、古代の用水を詳細に検討しており、その具体例としては裂田溝・針魚大溝・依網池・狭山池を取り上げている。裂田溝を除く3者に関しては、前著の『歴史時代の地形環境』を要約しつつ、その後の成果を踏まえて新たな見解を随所に加えている。

裂田溝は『日本書紀』に記された池溝関連の記載の中で、詳細な検討が可能な畿外での希有の事例ではあるまいか。福岡県的那珂川の右岸に位置し、安德台地上の耕地を潤す現存の「裂田水路」を中心に検討している。同じく、『住吉大社神代記』に載る針魚大溝は、自然灌漑が不可能な大阪府南部の段丘面を潤すために、東除川の水を堰き上げたものである。現地の踏査や地籍図などによって大溝の位置を復原するとともに、現在の地表に残る水田の幅(13~15m)ではなく、検土杖によって地下に埋没しているかつての大溝の幅を6~8mと復原しているのは、著者の独壇場である。また、段丘面上を潤した後も、西を流れる天野川にその一部が流れこんで後述の依網池まで達し、「住吉堀割」によって住吉大社の門前まで達していたとの想定は、さらに十分な検討を要する重要な課題である。

古代の溜池として著名かつ重要な依網池と狭山池の復原・検討に関しては、本章に載せられた両池の復原図を一瞥するのみで、その成果のほどは明らかである。前者の依網池に関しては、近世中期の大和川の付け替えによって池が南北に分断されてしまい、現在の景観として残されておらず、正確な復原図さえも作製されていない現状であった。141頁に載せられた復原図によって、依網池の全体像がはじめて提示された。とくに、上町台地の東斜面を利用して築かれた依網池の堤防が、北側の東半分と東側のみ築かれていたとの指摘は重要である。50~60haもの面積を有したと復原される依網池の堤防の有り様から、同じく古代に築造された大規模・不整形の溜池である大和郡山市池之内町の伝・迹見池や田原本